

JOMF 派遣医師便り (2013. 12)

◆マニラ◆

台風 Yolanda (30 号) 被災地での医療援助活動で感じたこと

マニラ日本人会診療所

菊地宏久

2013 年 11 月 8 日、未曾有の台風 Yolanda がフィリピン全土を襲い、かけがえのない人々の命が自然の脅威に一瞬に呑み込まれてしまいました。医療施設も例外ではなく、多くの病院も被災し大切な命が奪われてしまいました。急ぎよ現地に向かい 11 月 16 日から 11 月 28 日の間、被災地で緊急医療援助に関わりましたので感じたことを述べたいと思います。

11 月 8 日、大災害がこのフィリピンでも起きてしまいました。「何かできることがある、とにかく現場へ行き救援活動をしなければ!」。居ても立っても居られずレイテ島に向かう準備をしました。11 月 17 日、妻と二人で持てる限りの医薬品や食品を持ちレイテ島に入りました。セブのマクタン島へ向かい、マクタンからは航空機パイロットの石田武司さん(セブ日本人会会長)に小型セスナ機でのフライトをお願いしました。上空から見えるレイテ島のタクロバン(Tacloban)やタナワン(Tanauan)は日本の 3.11 の津波被害を想起させる壮絶な状況でした。レイテ島のオルモック(Ormoc)空港なら着陸できると伺い、Ormoc に着陸しました。この Ormoc も甚大な被害を受けた地域で、空港は開いていましたが一般の客は全く見当たりませんでした。空港には軍の輸送機や海外機関からの小型飛行機が停まり、軍の輸送機から水や食料の入った袋や木箱の援助品積み下ろしを大勢の軍人達がしていました。

空港から近くの OROMOC DISTRICT HOSPITAL も被災しているとのことで、その病院へ向かうことにしました。空港の周囲には援助物資配給を待つ人々がつめかけていました。トライシクルを見つけて病院へ向かいました。病院までの道沿いの家々は無残にも破壊されています。かろうじて倒れずに残っている家の屋根は吹き飛んでいました。電柱は道路に倒れ電線は切断されブラブラと揺れ、道路はいたるところで封鎖されていました。

30 分くらい走ったところで病院に着きました。入り口には赤ちゃんを抱きかかえた痩せた母親が不安そうな面持ちで立っていました。コンクリート建ての病院も強風と大雨で屋根や壁は吹き飛び、建物内の入院ベッドは大きくひっくり返ったままでした。排水が悪いため 1 階病棟の部屋や廊下の床にはまだ雨水が淀んでいました。手術室や分娩室は跡形もなく壊れ、手術器具は飛び散り無残な状態を現していました。どうにか壊れずに残った玄関ロビーで患者さん 10 人くらいが手当てを受けていました。床に寝ている患者さんもおら

れました。枯れ木のように痩せ細った女性がロビーで横になり点滴を受けていましたが、声を発する元気もなく憔悴しきった様子でした。被災後のパニック状態の争い事から腹部を銃で撃たれた青年がベッドに横たわり、彼の傍に母親が付き添っていました。患者さんばかりでなく医師・看護師や従業員たちも被災し、疲れ切った様子でした。電気もなく非常に暗い場所で患者さんたちは横たわっていました。そんな中でも患者さんや職員の方々はお話を聞かせてくれました。皆さん「何も無くなった」の一言でした。持参した医療用品や薬、食料品などをお渡しました。「点滴セットや針、ガーゼや絆創膏が無くて困っている」とのことでしたので、後日それら医薬品を調達して再度この病院に向かい届けました。

しかし被災地はレイテ島ばかりではありません。セブ島の船着き場にはレイテ島を含む他の島からの避難民でごった返していました。着の身着のまま他島から避難してきた人、あるいは島々に移動しようとする人たちで混乱していました。筆舌しがたい悲しさの表情を持つ姿がそこにありました。夜になると機関銃を持ったセキュリティーガードや軍人が増え、急激に増加している犯罪を監視していました。

船着き場まで乗せてもらったタクシー運転手に話を聞きました。「(運転手の) 家族はセブ北部に住んでいる、今回の台風で村全てが無くなってしまった、日本の Tunami と同じ状態だ、医療援助が緊急に欲しい」とのことでした。“支援の地域格差”についても訴えていました。車、飲料水や医薬品を調達し、セブ島最北端のダアンバンタヤン(DAANBANTAYAN)に行くことにしました。北部に車を走らせるほどに道沿いの木々が倒れ、家が崩壊している風景が目立つようになりました。DAANBANTAYAN 地区に入るとその光景は Ormoc と同様にすさまじいものでした。ただ人口がもともとあまり多くないためタクロバンや Ormoc に比べると死亡者数は多くはなかったと報告されているようでした。マスコミ関係者も全く目にしませんでした。道路沿いには半身裸の赤ちゃんを抱いた母親や何も口にしていない子供たちが両手を差し出して物乞いをしていました。“今飲む水が欲しい”、“今食べるコメが欲しい”と訴えていました。車に積み込んでいた医薬品、飲料水や米・食料を少しずつですが手渡ししていきました。住民の方々は、衛生的で健康な生活をしているとは全く思えない状況でした。ぜひともここで健康相談会をしたいと考え、セブ市の DOH(厚生省)や WHO にも相談に行きました。そして後日に同地域の道端を利用して村の人々の健康相談会を行いました。

場所は道路沿いの木陰で、3人くらいが座れる屋根付きの長椅子が一つあるだけの場所でした。健康相談会は車の運転手さんとその友人、そして私と妻の4人で行いました。健康相談を始めると初めは10人くらいでしたが、近所の人々がたくさん、100人以上が集まってきました。皆さんは話したいことがたくさんあるようでした。ある患者さんは「健康相談したいがお金はかからないのですか？」と小さな声で質問されましたので「もちろん無

料ですよ」と答えると、今まで溜まっていた心配事を溢れ出すように話し始めました。太陽の光が照りかえす猛暑の中を長蛇の列を待ちながら、それぞれの心配事を訴えられました。外傷の患者さんが多いと思っていましたが、息切れや咳、疲れ、動悸、胸の痛み、持病の慢性疾患への不安などの内科的症状を訴える方が多くおられました。少数ですが、重篤な病態の患者さんもおられました。貧しさのため今までに十分な診療を受けたことがなかったのでは、と思われる方々が多くおられました。健康相談会を終えて帰ろうとすると大勢の方々が道路いっぱいになり、「Thank you, thank you, thank you, come again, come again」と何度も何度も言ってくださり、目頭が熱くなりました。

この記事はマニラに戻った後の2013年12月2日に書きました。今マニラでは別世界が広がっています。停電など考えられない眩いデコレーションの美しいクリスマス飾りつけが街中で見られます。楽しいクリスマスソングが豪華なショッピングセンター内を流れています。日常の平安の有難さを感じるとともに、被災した人たちがどのような気持ちでクリスマスや新年を迎えられるのかと思うと本当に胸が痛くなります。現在は世界中の視線を浴び、海外から多くの援助協力も来ています。日本での災害援助でも同様ですが、援助や政策が一時的対策に終わることなく、長期的な視点に立って、世界中が暖かく見守っていくことが大切です。

被災した皆さんの一日も早い復興をお祈りいたします。

最後になりましたが、新聞社やTV局、行政からのひっきりなしの依頼で非常に忙しい中を我々のためにセスナ機を用意して下さり、状況を詳しく説明して下さった石田武司機長（セブ日本人会会長）、櫻井哲也機長に心より感謝いたします。